

現代図書館学講座 8

資料整理法特論

監修 渡邊正亥

現代図書館学講座 8

資料整理法特論

監修 渡邊正亥

共著 長谷川宏
成井恵子

資料整理法特論

監修者

前大東文化大学教授 渡邊正亥

東京学芸大学教授 北嶋武彦

大谷女子大学教授 中嶋正夫

編集委員

茨城女子短期大学助教授 林 收正

女子聖学院短期大学講師 長谷川宏

茨城女子短期大学講師 吉澤輝夫

国会図書館連絡部国際交換課長 中森 強

帝塚山短期大学教授 和田弘名

執筆者及び執筆分担一覧（五十音順）

日本原子力研究所技術情報部 成井恵子（1部）

女子聖学院短期大学講師 長谷川宏（2部）

目 次

第1部 逐次刊行物———— 9

第1章 序 説…………… 12

第1節 雑誌・逐次刊行物の重要性…………… 12

はじめに／単行書の情報との相違

第2節 逐次刊行物の定義…………… 16

逐次刊行物の定義／定期刊行物の定義／逐次
刊行物の類似出版物／叢書との関係

第2章 逐次刊行物の種類…………… 26

第1節 種別の必要性和視点…………… 26

種別の必要性／種別化の視点

第2節 発行頻度…………… 29

第3節 発行国・発行地…………… 30

第4節 使用言語…………… 32

第5節 逐次刊行物の資料形態…………… 34

定期刊行物：雑誌／年報・年鑑・年表など／
会議議事録・会議出版物／報告書・紀要・技
報／レポート／ニュース誌・通信類／新聞

第6節 逐次刊行物の形体…………… 60

第7節 発行団体…………… 63

学協会／大学／出版社／官公庁・政府機関

第8節 逐次刊行物の性格…………… 71

第9節 逐次刊行物の目的…………… 73

第10節	逐次刊行物の内容分野・読者層	75
第3章	逐次刊行物の選択と収集	77
第1節	逐次刊行物の選択と収集の基準	77
	評価と収集の方針	
第2節	逐次刊行物の収集方法	88
	外国雑誌の購入／国内雑誌の購入／直接購入	
	／入会／寄贈受／交換	
第4章	逐次刊行物の受入れ	96
第1節	逐次刊行物の荷受け	96
	宛先の確認／アドレス表示／開封	
第2節	逐次刊行物の受入れ記録	99
	受入れチェック準備／受入れチェック	
第5章	逐次刊行物の製本	107
第1節	保存基準と製本準備	107
	製本の種類／製本準備	
第2節	製本発注と検収	113
第3節	製本雑誌類の受入れ装備	116
第6章	逐次刊行物の整理	118
第1節	整理の必要性和方法	118
第2節	整理（Ⅰ）分類と目録	120
	分類／目録／目録の記述	
第3節	整理（Ⅱ）主題分析・書誌記述・抄録	136
	主題分析／書誌記述／抄録	

第7章	逐次刊行物の配架	146
第1節	新着雑誌・未製本雑誌の配架	146
	最新着雑誌の特別展示／新着雑誌の配架／配架区分／配列順序／日常配架	
第2節	製本雑誌の配架	150
第3節	レポート等の配架	151
	レポート・ミメオグラフの配架／レポート・マイクロフィッシュの配架	
第8章	逐次刊行物の利用	155
第1節	利用（Ⅰ）閲覧・貸出し・複写	155
	閲覧／貸出し／文献複写	
第2節	利用（Ⅱ）情報検索	161
	二次資料マニュアルサーチ／情報検索	
第2部	郷土資料	165
第1章	郷土資料の定義	168
第1節	郷土の概念	168
第2節	郷土地域の範囲	169
第3節	公共図書館と郷土資料	171
第4節	郷土資料に対する類語	175
第2章	郷土資料の種類	178
第1節	先人による種類分け	178
第2節	資料の内容による種類	179

第3節	記録の方法による種類	180
第4節	地方行政資料と民間資料	181
第5節	狭義の郷土資料と広義の郷土資料	184
第6節	郷土関係刊行物の実例	185
第7節	雑誌と新聞	190
第3章	郷土資料の収集	194
第1節	郷土資料と収集計画	194
第2節	資料の所在発見と方法	196
第3節	収 集	196
第4節	図書館間相互協力と類縁機関との提携	199
第4章	郷土資料の整理	201
第1節	受入れと除籍	201
第2節	分 類	201
	主題分類を先にする分類表／地域分類を先にする分類表／郷土地域刊行物と郷土人著作／別置記号と図書記号／市町村図書館の郷土資料分類表	
第3節	目 録	210
	目録カードの書き方について、幾つかの留意点／利用のための目録の編成	
第4節	装備と配架	231
第5章	郷土資料の利用	236
第1節	郷土資料の書架と郷土資料室	236

第2節	郷土資料と参考業務	237
第3節	書誌サービス	238
第4節	郷土資料と館外貸出し	241
第5節	郷土資料と図書館PR	241
第6節	郷土資料と復刻	242

索引	244
----	-----

第 1 部 逐次刊行物

は し が き

今日、行われている一つの仮説によると、人間社会を支えているものは、物質と情報とエネルギーであるという。そして人間が動物と異なる点は、情報と目的意識を持っていることである。人間は情報を得て自分の思想及び行動を再編成し、それによって自分の存在を理由づけるための更に良質の情報を求めようとする意欲を持っているのであって、そのことが人間行動を促進させているのであると考えられているのである。

人知の増大は、キリスト降誕以降1750年までの間によく増加し、1750年から1900年までの間、つまり150年かかってそれまでの2倍になったのである。その後の倍増には1900年から1950年までの50年間に必要としたのであるが、今日では8年～10年というわずかな年月で、それまでの2倍になるだろうと言われている。

この人知の発展拡散に大きな力を貸したのが逐次刊行物である。逐次刊行物は今世紀に入ってから急激に増刊され、特に科学・技術関係の年間発表論文は、“Journal of the American Society for Information Science, 1980年”によると、一般科学50万、化学30万、工学30万、生物科学25万、物理学25万、健康科学24万件というのである。

わが国では、逐次刊行物の整理基準の確立が、図書のそれとは甚だしく遅れていることもあって、ややもすると軽視されがちであるが、本書によって新たな開眼を望むものである。

昭和58年6月

渡 邊 正 亥

第1章 序 説

第1節 雑誌・逐次刊行物の重要性

1. はじめに

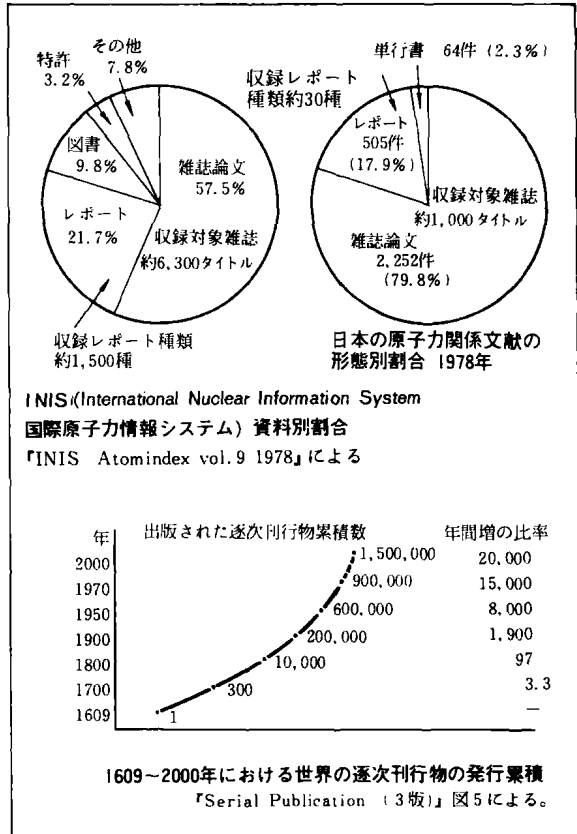
現代は「雑誌の時代」といわれ、1年に約250種の日本語の雑誌が創刊されているといわれる(昭和56年現在)。この中には、大衆誌とか通俗誌がどのくらい含まれているのか分らないが、とにかく、出版社の側も利用者の側も、雑誌というものに多くの関心を持ち始めたのである。例えば、自然科学関係者の間で広く読まれる雑誌として、外国では「Science」「Nature」(London)「La Nature」(Paris)、「Naturwissenschaften」等々がある。国内でも「自然」「科学」「科学朝日」等々があり、より高度な専門誌としては、各学会誌(「日本物理学会誌」「日本化学会誌」「日本原子力学会誌」など)や、論文集(「電気学会論文誌」A・B・C各編、「日本機械学会論文集」A・B・C各編など)が挙げられる。そして今日、教養誌・大衆誌として自然科学を扱う雑誌が創刊され、「雑誌の時代」という言葉を生んだ。その一つ「ニュートン」は、「Newton」と「ニュートン」の和洋の雑誌名と、「Graphic Science Magazine」との副誌名を持ち、雑誌の時代にふさわしい体裁を整えている。つまり、従来の雑誌が文字情報によっていたこととは対照的に、カラフルな写真・図表を多く取り入れ、映像情報を組み入れて広い読者層を得ようとしている「新しいタイプの雑誌の時代」とも考えられ、そういった流れの中で「ナンバー」「ビッグ・トゥモロー」「フォーカス」「ダカーボ」「ウィズ」「スコラ」「エル・ジャポン」等々の雑誌が生まれている。

これらの現状は、情報資料形態の単行書(いわゆる本、書物といわれる Book)から、別の雑誌(Magazine)というものへの関心の移動、重要性の認識の変化が行われつつあることを示しているが、科学技術や医学などの分野では、雑誌の重要性が統計的に明確にされている。一例として、原子力分野の二次資料、抄録索引誌に採択された文献を分析してみると、6割から7割が雑誌論文で占めら

れており、この傾向は、ほかの分野にも見られるものである。

右に示したグラフは、文献データベース INIS (International Nuclear Information System 国際原子力情報システム)での1978年の統計によるが、雑誌論文の占める比重は、12年間同率となっている。

雑誌論文という文献を単位とした小さな(ミクロ的)とらえ方ばかりでなく、雑誌の誌名による資料単位の大きな(マクロ的)とらえ方から見ても、雑誌の情報資料としての量の増加は著しい。右に示した図表によれば、今後、この傾向はますます強くなることが予想されている。



* データベースとは次のように規定されている。

文献(論文・記事)・特許・図書などの一次情報は、なんらかの加工を加え、圧縮して二次情報化できる。この二次情報は、冊子体・マイクロフィッシュあるいは磁気テープ(MT)の形で販売または提供される。これらを行う機関をデータベース・プロデューサと呼ぶ。文献情報を中心としたものを文献データベースあるいは書誌データベース(Bibliographic Database)と呼ぶ。また数値データの場合、数値データベース(Numeric Database)と呼ぶ。

一般に磁気テープを媒体に市販または提供されるので、JICSTテープ、CA SEARCHテープ、INSPECテープなどと呼ばれるが、テープ、ファイル、データベースと呼び名は多い。オンライン検索サービスで提供される場合はオンラインデータベースと呼ばれる。

『科学技術情報ハンドブック』より

1902～)は、逐次刊行物の重要性について次のように記している。「専門図書館にとっても一般図書館にとっても、逐次刊行物は、調査コレクションのバックボーンを形成している。逐次刊行物は、ほとんどの図書館の組織されたレファレンス・ワークにとって欠くことのできないものであると同時に、図書館の仕事の価値を多く含んでいる」。

2. 単行書の情報との相違

雑誌とか、逐次刊行物という資料の情報に対して、関心が高まり、重要視される理由には、単行書(または数冊から成る単行書)が点としての存在であることに對して、これらは、その先端が伸びていく、動く線としての作用がある。単行書と異なっている点を挙げてみると、次の通りである。

① 継続的、定期的に提供される情報

逐次刊行物は、発行の中止・停止及び廃刊などがない限り、その刊行がとぎれることなく継続していく。このうち、週に1回、10日に1回、月に1回などと刊行が定められているものを定期刊行物としているが、これには定期的な継続性が見られる。逐次刊行物は誌名単位の継続性ばかりでなく、論文の単位でも連続性が見られる。これらには、同一の論文標題が与えられ、さらに第1報、第2報、第3報と、より詳細な副標題が付けられている。

② 最新の情報

逐次刊行物は、各号を全体として、またおのおのの収録の雑誌論文に新しさがある。単行書は、今までに築かれた知識を蓄積して体系づけて著述するため、一貫性はあるが、新規性には乏しくなる。逐次刊行物の収録論文には、何か新しい研究調査の成果が含まれている。また、新しい研究開発のテーマが与えられた場合、論文をサーベイ(走査)することによって、他の機関で同種の研究に着手しているか否かが、ある程度は把握できる。さらに、新しい分野が現れれば、それに対応した逐次刊行物が創刊される。

③ 迅速な情報の伝達

新しい研究成果や業績を、速やかに情報資料として伝達する。情報の迅速な流通性がある。情報のタイムリーな提供に主眼を置いている。このため、

速報性の強く要求される部分を別置して、Letter Journal として独立させている例も多い。単行書の場合は、即時性の要求よりは、確立し集大成した情報であることが要求される。

④ 断片的な記事の連結

逐次刊行物の記事または論文は、広い主題での関連はあるけれども、個々に独立しており、部分的であり、一貫性はない。従って、内容的には全く関連のない論文が隣り合って掲載される。ところが、自分にはあまり関係のない記事にばらばら目を通して拾い読みをすることが、極めて有効な場合が多い。「ブラウジングする(ざっと目を通す)」ことが、発想を変え、新しいアイデアにつながるからである。

⑤ 詳細で専門的な情報

逐次刊行物の記事または論文は、いきなり専門的な主題について述べている。それは、非常に狭い範囲のことを、深く詳細に取り扱っている。情報が細部にわたって明確に表記されている。

⑥ 多面的な視点による情報

逐次刊行物においては、ある専門的な主題について、多面的に検討するために、立場や観点の異なった著者による記事や論文を収録する。さまざまな結果が収録される。また、研究成果の固定したものばかりでなく、現時点で得られている成果を、中間的報告として記す場合もあり、別の角度からの検討を加えることによって、最終的には内容が多面的に展開していく。

⑦ 簡潔で充実した情報

逐次刊行物において、利用者が実際に必要とする情報は各号の一つまたは二つの論文であろう。論文は、ページ数の制約もあって簡潔に比較的小さな量でまとめている。単行書の一章の書き方よりは短く、情報を濃縮して焦点を絞っている。この点が逐次刊行物の論文の集中的なコピーによる利用につながっている。

⑧ 評価された情報

学協会などの発行する逐次刊行物の中には、会員や専門家の投稿論文を主としているものが多い。この場合、投稿された論文は、各刊行物の編集委員